大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

映画『パプリカ』におけるワードサラダという表現：作中における2 つのワードサラダの考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂中, 亮太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017620

映画『パプリカ』におけるワードサラダという表現
―作中における2つのワードサラダの考察―

坂　中　亮　太

Ⅰ．問　題

世の中には意味不明で理解することが出来ないものが数多く存在しており，そういった表現は，「狂気」的表現とも呼ばれている。「狂気」的表現からは，合理的，道徳的及び理性的に適切でない，という考えを感じ取ることが出来ず，寧ろ全く正しく適切である，という考えさえ感じ取ることが出来る。「狂気」的表現の理は現実世界の理とは異なる為，結果的に理解出来ない事象として受け止められるのである。

そういった理解の範疇を超えた「狂気」的表現に対して，受け手は恐怖や忌避の感情を抱く一方で魅力的という感情も同時に抱く人がある。筆者もその一人である。その為，本稿では「狂気」的表現を「意味不明で理解出来ない，恐怖や忌避の感情を抱くと同時に魅力的と感じさせるもの」と定義する。

「狂気」的表現の例として，今敏のアニメ映画『パプリカ』（2006）がある。『パプリカ』には「狂気」的表現と感じさせる表現にワードサラダとパレードがある。作中でワードサラダをそれまで正常であった者が突然話し始める。その話す様子や内容の意味不明さが相まって，見た者に「狂気」的と感じさせる。仏像等の人工物や蛙等の生物が砂漠から街へ段々に進行していくパレードは夢の象徴として扱われている。このパレードは様々なものが犇めき合い，混沌としながらも同一方向に並んで動く，という秩序も併せ持つ。その様子は意味不明さに依る恐怖を感じながらも魅入ってしまう「狂気」的表現である。筆者は『パプリカ』のワードサラダの魅力を明らかにしたいと思い，本稿での研究方法に至った。

Ⅱ．今敏と『パプリカ』

今敏（1963-2010）は，現実と夢が混じり合う作品を多く手掛けた日本のアニメーション映画監督である。映画『パプリカ』は2006年公開の日本のアニメーション映画で，筒井康隆の同名小説を原作としている。

『パプリカ』のストーリーは原作と映画で大筋は変わらないが，所々は異なっている。また，映画『パプリカ』の最大の特徴はワードサラダ（以下WS）とパレードで，どちらも原作には無い。WSは原作においても登場するが，統語論的に崩壊しており，映画に登場するWSとは異なる。映画のWSは統語論的には崩壊していないが，意味の繋がりが崩壊している為，理解出来ない。以下は『パプリカ』のあらすじである。

千葉敦子は精神医療総合研究所で働く傍ら，同僚の時田浩作が作った，夢を共有する装置のDCミニで，夢探偵パプリカとして秘密裏にセラピーを行っていた。しかし，ある日DCミニが盗まれる。所長の島寅太郎を含めた3人は事態収束を目指すが，科学技術を用いた治療反対派の理事長，乾精次郎の詰問を受ける。その詰問中，島は突然WSを言い始め，最終的には走って窓から飛び降りる。一命を取りとめた島だが，DCミニに依って誇大妄想患者の夢を投射されていることがわかり，盗んだ犯人が時田の助手の氷室であること，そして敦子の同僚の小山内と乾が黒幕と判明していく。終盤には夢の世界と現実世界が繋がり，人々が夢に侵されていく中，現実に現れた巨大な乾を撃退して事態は収束する。

Ⅲ．目的と方法

『パプリカ』のWSやパレードといった「狂気」的表現には，意味不明故の魅力があるのではないだろうか。本稿では『パプリカ』のWSの解釈と考察を行うことで，「狂気」的表現が持つ魅力を明らかにすることを目的とする。また，解釈と考察を経て筆者が感じたことを示すことは，「狂気」的表現の魅力と，「狂気」的表現に直面して恐怖と魅力を感じる人の心の機序を知る一助になるのではないか，と考えている。

方法は映画『パプリカ』のWS部分の解釈と考察を行った。当作品は筒井康隆の小説『パプリカ』が原作である為，そちらも参考とした。具体的な方法は，作中のWS全25個をそれぞれ品詞分解的に単語や文節毎に分解し，そのイメージやメタファー的連想の拡充を行い解釈した。その後，解釈から筆者が見出したWSの中に潜在する意味要素6つにWSの各解釈を分類した。本稿ではそのうち作中で登場順が早いWS2個を取り上げる。

Ⅳ．考　察

１．2つのWS

本稿において考察対象とした2つのWSを挙げる。

【WS1】（話者：島寅太郎）

「DCミニは精神治療の新地平を照らす太陽の王子様です。必ずしも泥棒が悪いとはお地蔵様も言わなかった。パプリカのビキニより，ＤＣミニの回収に漕ぎ出すことが幸せの秩序です。五人官女だってです!カエルたちの笛や太鼓に合わせて回収中の不燃ゴミが吹き出してくる様は圧巻で，まるでコンピューター・グラフィックスなんだ，それが!総天然色の青春グラフィティや一億総プチブルを私が許さないことくらいオセアニアじゃあ常識なんだよ!今こそ，青空に向かって凱旋だ!絢爛たる紙吹雪は鳥居をくぐり，周波数を同じくするポストと冷蔵庫は先鋒を司れ!賞味期限を気にする無頼の輩は花電車の進む道にさながらシミとなって憚ることはない!思い知るがいい!三角定規たちの肝臓を!さぁ!この祭典こそ内なる小学3年生が決めた遙かなる望遠カメラ!進め!集まれ!私こそがお代官様!すぐだ!すぐにもだ!わたしを迎えいれるのだ!」

【WS2】（話者：日本人形（氷室啓））

「真昼の空のお日様が夜ごとの闇を照らします。夜が夢見る昼なのに，光が夢見る闇なのに。何も知らないお日様は闇を葬り影を焼き，いずれは自ら焼き尽くす。夜に花咲く木の下闇は月夜の民が憩う場所。真昼の人は通せぇんぼ!」

２．6つの意味要素

『パプリカ』のWSでは1つの言葉を多義的に解釈できる。その多義的な意味に起因して意味不明さが増しているとも考えられる。前提として映画『パプリカ』には映画独自の設定や映画には無い原作のみの設定も多い。今（2007a）は，原作のボリューム的に，原作を仔細に踏襲した映画化は出来ないと考えていた。内容に収まらない部分がWSやパレードに込められているのではないだろうか。また今（2007a）は同インタビューで，「原作を一旦単純な形に戻し，そこに原作『パプリカ』や筒井先生の他作品からも，取り込めそうなアイディアをその枠組みに収めて行くことにしました。気の触れた所長や研究所員が口にする言葉などは，筒井先生お得意の言葉遊びをイメージしたものです」とも述べている。

これらを踏まえながら，作中の全WSの単語を可能な限りに拡充して解釈を試みた。まず，WSに登場する象徴的な言葉の意味を捉えた。WSの登場順に解釈のプロセスを辿ったが，関連した連想が生まれたことで過去のWSを振り返り，新たな連想が拡がることもあった。また，後にWSを見返した際にも新たな連想が芽生える事もあった。このプロセスを経て，筆者が各WSに含まれていると考えた意味要素が，以下の6つである。

① 異性愛と同性愛
② 時田と敦子
③ 敦子と乾（敵と味方の構造）
④ 敦子とパプリカ
⑤ 宗教と科学
⑥ パレードの詳細と補足的説明

これらの6つの要素がWS中に組み込まれることで意味が重層的となる。その結果として全体の意味不明さが増すのである。

1つ目の意味要素は，味方と敵で恋愛対象が異なる為である。敦子達は異性愛，乾達は同性愛である。原作において乾は同性愛者である。映画において直接的な言及は無いが，小山内は乾の愛人であると示唆する表現があり，乾が同性愛者の氷室に性行為の機会を与えている事が示唆されるシーンもある。現在と比して制作当時は，同性愛への理解が進んでいなかったと考えられ，同性愛には日陰のイメージが付随する。同性愛の乾が敦子達を明確に目の敵にする描写や女性卑下の描写もあり，対立のメッセージ性を強める。

2つ目の意味要素は，互いの恋愛感情が原作では明示されている一方，映画では終盤で初めて描写される為である。宮本（2019）はこの違いについて，小説版の知識が無い観客にはやや唐突に感じられるものの，それまで抑圧してきた恋愛感情を解放させる場面として機能している，と述べている。WS中には恋愛感情の仄めかしと解釈できる箇所もあり，映画で省略した原作の設定や描写をWSに組み込んでその部分を補っていると考えた。

3つ目の意味要素は，両者が敵と味方である為である。これは主軸の二項対立として明確に描写されている。加えてWSにも意味を組み込むことで，敦子側から乾側へ，また乾側から敦子側へのメッセージが表現されている，と解釈できる。

4つ目の意味要素は，同一人物にもかかわらず，敦子は生真面目でパプリカは奔放，と両者が対照的な為である。服装にも差は出ており，敦子はスーツである一方，パプリカは赤いシャツにデニムとカジュアルな服装である。ここから両者は互いのシャドウ的存在と言える。二人は終盤に乖離して独立した存在となるが，後に再統合する。乖離中にパプリカの言葉に依って敦子に変化が訪れ，そこで初めて時田への感情を露

わにする。WS中にも敦子とパプリカは，それぞれ独立したキャラクターとして読み取れる箇所も多い。

5つ目の意味要素は，乾と敦子がそれぞれを象徴している為である。乾は夢を神聖なものと考えており，その領域に科学が踏み込む事を拒む為に今回の事件を起こす。“神聖”には宗教性が付随し，乾は宗教を象徴している。一方の敦子はDCミニで治療を行っている為，科学の象徴と言える。また，ここにはそれぞれ人物のみに関する解釈も含まれる。

6つ目の意味要素は，映画において原作の仔細な踏襲が出来なかった為である。悪夢の象徴とされるパレードは晴れやか故に気味悪く，意味不明である。しかし，WS中にそれに関連していると解釈可能な表現もあり，パレードとWSを結びつけることが出来る。

また，原作のみの設定には，乾が或る宗教を信仰していること，DCミニの開発で敦子と時田はノーベル賞候補になっている等がある。これらの設定をWSに入れ込むことでWSの意味の重層性を深めている，という印象を映画と原作の両方に触れると受ける。

3．WS考察

【WS1】

〈異性愛と同性愛〉

「賞味期限」は食べ物を美味しく食べられる頃合いの連想から，生殖的な食べ頃という表現が浮かぶ。生殖活動は異性間で行われる為，そこから異性愛，そして敦子達に連想が繋がる。生殖的な食べ頃と，後述するがDCミニの完成，という二重で気にしている敦子達を「無頼の輩」である，と乾は蔑んでいると解釈できる。

「総天然色」は，日本ではフルカラー映画の宣伝に使われていたこともあり，鮮やかな色彩の印象を受ける。故に「総天然色の青春グラフィティ」は，晴れやかで彩り鮮やかな青春を想像し，陰と陽のうち陽のイメージが湧く。その陽を「許さない」とある為，これは対立する陰，即ち乾側のメッセージと解釈でき，敦子達への敵対心を強く感じさせる。

〈時田と敦子〉

「王子様」からは敦子にとっての白馬の王子様という連想が浮かんだ。敦子は時田のことが好きである為，この文は時田が敦子にとっての王子様的な運命の人，と解釈出来る。

〈敦子と乾〉

「太陽」から光を連想し，そこから正義イメージの敦子達が連想される。

「泥棒」はDCミニを盗んだ犯人を指す。乾にとって盗むよりもDCミニ使用の方が重罪で，DCミニ回収は使用阻止に繋がる為，盗みは正しい，という乾の主張が読み取れる。

「地蔵」は，苦悩の人々を大慈悲の心で救う子供の守り神である。そこから仏をイメージし，こちらも泥棒の正当化に繋がる。子供の守り神という点からは，氷室を連想する。作中で氷室は女の子の日本人形姿で登場することが多い。その氷室を「地蔵」が守ることで，氷室のDCミニを盗む行為が一層正当化させる。また，パレードに仏像や地蔵が登場する事も関連していると考えられる。

「回収」には2通りあると考える。1つは泥棒からDCミニを取り戻す，という敦子側の「回収」，もう1つはパプリカからDCミニを回収する，という乾側の「回収」である。敦子側は，DCミニの回収が優先で，それが「平和」（事態収束）への「秩序」（順番）に繋がると考えている。一方の乾側は，DCミニ開発停止の方が優先（秩序）であり，DCミニを封印することで神聖な夢の世界の安寧（幸せ）が保たれる，と考えていると解釈した。

ここで敵と味方という構造も見ていく。「五人官女」は五人囃子と三人官女が混ざった言葉で，五人囃子は雛壇での雅楽担当者達，三人官女は君主の周囲に居る者達である。君主には乾とパプリカが該当する。パプリカの場合は女王のニュアンスがあり，后妃よりも君主に近い。官女は，乾側は小山内と氷室が思い浮かぶ。もう一方のパプリカ側ならば，島と時田と粉川である。粉川とは主要人物の一人で，パプリカの治療を受ける島の友人であり，映画は彼の治療から始まる。粉川が夢の世界でパプリカを救うシーンがあり，彼も敦子の味方である。「五人官女」であるのは，介入によるコンタミネーションの影響で敵味方が混ざっている為と解釈した。ここからもWSが持つカオス感を受け取れる。

「プチブル」とは，中間層の裕福ではないがブルジョワ意識を持つ者達である。一億総○○という言葉は一般に日本全体を指し，日本全体がプチブル意識にある印象を受ける。それを「許さない」為，現状に対して危惧を抱いている乾の心情が窺える。現状とは，DCミニの研究が発展し，夢分析の新しい主流となることを指す。原作において敦子と時田はノーベル賞候補であり，受賞すると主流化に勢いがつく為，それを何としても阻止したいという乾の気概が，原作を踏まえると読み取れる。

「オセアニア」からは大きな海を想像し，そこから大きな夢の世界を連想した。

「花電車」とは乗客無しで運行される装飾電車である。また，性的なパフォーマンスでもある。この装飾電車の意味から「花電車」はパレードのイメージと繋がる。その場合「花電車の進む道」は乾の計画と換言できる。ここの「シミ」は敦子やDCミニを指し，計画の邪魔をするな，という乾のメッセージと解釈できる。

「花電車」が持つ性的意味からも連想を行う。花電車は観るだけのパフォーマンスである。花電車が持つパレードイメージから連想すると，パレードは夢の象徴として機能しているもので，神聖であるから触れてはならない，という乾側のメッセージと解釈出来る。

「肝臓」は有害物質を分解する。有害物質とは敦子達を指す。そう捉えると，夢を象徴付けるパレードの凄さや，夢の世界を守る乾の強さを「思い知」らせる意図が窺える。

「小学3年生」からは子供の世界を連想し，パレードに登場する人形やブリキの玩具が浮かび，子供の世界と夢の結びつきが強まる。そこに乾達が持つ，科学の全てを支配したい，という「内なる」幼稚さが表れているように感じる。

「お代官」は政治において主君代理を務める役職である。それ故に正義が連想され，私の行う事は全て正しい，という乾のメッセージが浮かぶ。そして「私」が王にふさわしい存在である，という乾の主張を「こそが!」を用いて強調しているのである。

「すぐだ!すぐにもだ!」は，乾が計画推進を急いでいる印象が強い。もしも敦子達がノーベル賞を授与すると，科学に依る夢の世界の支配が正当化され，乾にとって最悪なシナリオが完成する。これを回避する為に少しでも早く計画を進めて科学を夢の世界から排除し，安寧を保とうとしているのである。

〈敦子とパプリカ〉

「パプリカのビキニ」からはパプリカの治療を連想した。パプリカの治療は官能的で性的な交わりが多い。原作で過去に島はパプリカの治療を受けており，その影響で島にとって夢の象徴はパプリカになっている。

〈宗教と科学〉

「新地平」から新境地のイメージが想起される。また，「王子様」は未来の王であり，未来の主君や主流というイメージが浮かぶ。これらの連想から，DCミニは精神治療における革新的発明で，将来的に主流となるだろう，という科学目線のメッセージと解釈した。

「プチブル」は心が満たされ，幸せな夢を見ている状態と解釈した。廃人化した氷室が幸せそうに眠る姿からも，夢の被介入者は悪夢に犯されていながらも幸せな状態である。目を覚ました島が敦子に「もう少しで世界を思いのままに出来る，そんな気がした」と語るシーンもあり，当人にとっては幸せで充実した夢だったと推測できる。つまり夢の世界でも「青春グラフィティ」を味わっている。筆者はここから肉欲的な印象を受け，パプリカの治療と結びついた。そこから，肉欲的に象徴されるパプリカの治療を許さない，という乾の考えを「青春グラフィティ」と「プチブル」から読み取った。

また，「プチブル」は偽物のブルジョワであり，転じて【つくりもの】イメージが浮かび，【つくりもの】を許さない，という乾の意思が読み取れる。【つくる】行為が許されるのは聖なる神だけという考えを強調し，対の科学を否定している，と解釈出来る。

「賞味期限」は，先述した様に食べ頃や美味しさのピークまでの期限である。ここのピークはDCミニの完成を指す。作中に登場するDCミニは未完成でアクセス制御機能が無い。アクセス制御とは他のセラピーマシンとその使用者の意識への侵入を防ぐ機能で，この機能が無いと今回の様に悪用される。また，マシンを何度も利用したことでアナフィラキシーが起きる事も未完成である理由の一つである。

乾はDCミニの完成を望んでおらず，早急な開発中止を提言しており，DCミニの完成を望む「無頼の輩」とは，乾達の敵である敦子達を指している。

「シミ」は邪魔なもので，パレードや夢の邪魔となるのは，敦子やDCミニの様な科学である。もしもDCミニが世間に認められると，乾的には神聖な夢の世界が科学に依って危険に晒される。それを避ける為に夢の世界を守る必要がある。そこから，パレードの進行を邪魔するな，邪魔なものは全て夢に犯す，という乾の挑戦的な意思が垣間見える。

〈パレードの詳細と補足的説明〉

パレードには仏像や「地蔵」が登場しており，それもWSに関連している。パレードに登場する仏像や地蔵によって聖なる偶像のイメージ群が形成され，パレードの神聖性を受け手に印象付けていると解釈した。また，「カエルたちの笛や太鼓」もパレードに笛や太鼓を演奏するカエルが居る為，パレードに関する表現と捉えた。

セラピーマシンで共有して見た夢はコレクターに保存される，という設定がある。乾達はそこに保存されている夢を悪用して介入していく。その設定と「回収」から，DCミニを用いて夢を集めていくイメージを連想した。

「回収中の不燃ごみ」はDCミニで集めた分析中，または未分析の夢のイメージ達と言える。その夢のイメージが「吹き出して」湧いてくるならば，未解釈状態の力に満ちた夢が湧く様子は「圧巻」で，夢が持つ力の強大さや偉大さを表していると解釈できる。

「青空に向かって凱旋」という通常とは異なるベクトルの進行から，バベルの塔の様な神に接近する事がイメージとして湧く。神に近づくとは，神聖さをもつ夢に近づく事と殆ど同義である。そして夢に近づくとは介入を受けて，現実離れしていくことを表している。

また「凱旋」には帰ってくる，という意味が含まれており，今敏もインタビュー（2007b）で，パレードは「捨てられたものたち」と答えており，捨てられて帰る場所を失ったモノがパレードとしてイメージの源流である夢に帰る構図が見えてくる。

「紙吹雪」と「鳥居」はパレードに登場する。「鳥居」は神界と人間界の境界であり，夢と現実の境界と解釈する。その鳥居がパレードとして街に迫る様子からは夢の支配が広がる印象を受ける。そして沢山舞う紙吹雪は様々な夢の断片を表していると捉え，それを舞い上げる風は夢の力強さを表していると解釈した。作中でも現実と夢の境で小さな竜巻が起きている。これらを踏まえると，夢の断片の紙吹雪が境界である鳥居をくぐって現実に夢が流れ込む，という夢と現実が混ざり合うメカニズムがイメージ化される。また，本来動かない「鳥居」が動いている事象は，現実の道理が通用しない印象を与える。

「ポスト」からは夢を現実へ送る役割が思い浮かぶ。この役割は乾達に依る夢の介入と結びついた。そして作中でこの役割を果たすのは，介入の触媒にされた氷室である。「冷蔵庫」は食品の保存に用いられ，夢を保存するコレクターとイメージが結びつく。故に「ポスト」と「冷蔵庫」は乾達に依る夢介入のメカニズム（図1）を象徴している，と解釈した。

「三角定規」はそれぞれ角度が決まった秩序的な形である為，様々なものが混沌となりながらも一列になって進行するパレードが持つ秩序の側面を連想した。

「肝臓」は人体において重要な一種の核であり，そこからパレードの中核というイメージが生まれた。その核とは乾である。また，肝臓は不調の自覚が難しい。このことから，作中におけるいつの間にか夢の介入を受け，異変を起こす事と繋がる。

「祭典」はパレードや夢の晴れやかさの表現と解釈した。また，単に祭りではなく，「祭典」であることも意味深い。作中でパレードは人々に何かを見せつけている印象である。この場合，夢の力強さを誇示する意図があり，科学では夢に太刀打ち出来ない，という事を示す為に必要な一種の【儀式】の意味合いを見せる。

「遥かなる」と「望遠」の二つからは壮大さや巨大さといった夢の持つ象徴的な力がイメージされる。しかし，直後の「迎え入れるのだ」はその行為を相手側に委ねている，と解釈でき，話者の主体性が弱まっている事を印象づける。

「集まれ」から，力を一箇所に密集させ隊列を組むイメージが芽生える。これはパレードを指していると考えた。様々な混沌とした夢のパーツが，集合体になり秩序を帯びてパレードとなることで，夢のパワーが増していく印象を受ける。

【WS1】全体を見ると，前半と後半で主体性にブレを感じる。前半は「不燃ゴミが吹き出してくる様は圧巻」や「絢爛たる紙吹雪」の様に夢の力強さや晴れやかさを語る強気なメッセージが多いが，徐々に「お代官様」の様に，主君代理という役割に従ったり，「迎え入れる」の様に相手側に任命行為を委ねたり，自己での決断を避けている。ここからパレードや介入を受けた話者の島の主体性が次第に喪失している印象を受ける。

【WS2】

〈異性愛と同性愛〉

「真昼」や「お日様」の陽のイメージから，敦子側，そしてそこから科学や異性愛を表している。対の「夜」と「闇」は陰の方の乾側で，宗教，同性愛を指す。一つ目の意味要素を最も強く感じたのはこの【WS2】で

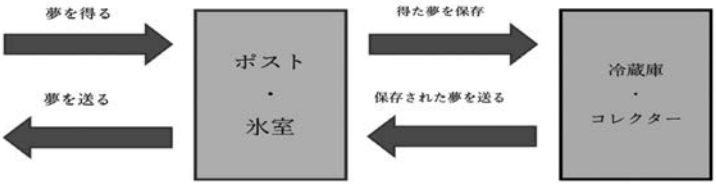

図1　夢介入のメカニズム

ある。冒頭は「お日様」が「闇」まで照らす，と読める。この読み取りと先述の捉え方を踏まえると，この文は，日なたに生きる異性愛者が陰に生きる同性愛者の領域に侵入してきている，と解釈できる。

「葬り」や「焼き」から，異性愛が同性愛を駆逐し，最終的には制御出来ずに「自ら焼き尽くす」という文と捉えた。この駆逐には性的マイノリティへの差別等が該当する。

「夜に花咲く～」の第一印象は性的嗜好に関するものであった。同性愛者はマイノリティであり，陽の目を浴びない草葉の陰でのみ安らぐ事が出来る。したがって陽の目を浴びたいという願望は窺えない。作品における同性愛のキャラクターの様子を見ても，周囲に嗜好の理解を求めている様子は無い。寧ろ理解を拒んでいる，という様な印象である。

〈敦子と乾〉

先述の通り，ここの「夜」は乾を表す。乾が「昼」を夢見ているという表現から，乾は陽の目を浴びる事を夢見ているのではないか，と考えた。陽が持つ正統派や多数派のイメージから，それを夢見る乾が権力を求めているという解釈に繋がり，少数派が多数派を夢見るという解釈が生まれる。また，「光」が「闇」を夢見ている為，多数派が少数派を夢見るとも解釈できる。つまり【ないものねだり】をしている。

「夜が夢見る～」から連想を拡げる。影は光が無いと存在出来ない。脇役と主役の二つはその影と光に該当する。この点から，少数派が夢見る多数派の解釈とも関連して，脇役ではなく主役になりたい，という願望を汲み取る事も出来る。この光が無いと影が存在できないという連想は，夢と現実が混同しているという解釈が出来ると同時に光と闇の対立を強め，区別をより判然とさせている。ここから，羨望へとまた連想が繋がっていく。

〈敦子とパプリカ〉

「昼」に活動するのは敦子，「夜」に活動するのはパプリカである。また，性的な雰囲気を醸すのはパプリカで，夜の雰囲気が付随する。故に昼は敦子で夜はパプリカを表す。

夜に咲く花の特徴として夜に映える色と芳香がある。芳香には色気のイメージがあり，原作で描写される敦子のプワゾンの香水が連想される。また，女性は花に形容される事もあり，「夜に花咲く」がパプリカを指し示す印象を強める。

また，夜に咲く花のヨルガオからも連想が拡がった。この花からは，夜の顔，という一面が連想される。昼とは違う陽の目を浴びていない顔であり，秘密の一面と言える。この一面とはパプリカの治療である。そんなパプリカという夜行性の花が，夢を守る立場の者達が憩う場所に居るとある為，夢の世界に介入するパプリカの治療が浮かぶ。

〈宗教と科学〉

「夜が夢見る昼なのに」からは，夜に見る夢が昼にもかかわらず現れている，という印象も受けた。「夜」が乾を象徴するならば，夢の世界の象徴とも言える。すると対の「昼」は現実を指す。ここには朝や夜中に目覚めて寝ぼけて夢うつつの感覚を持つ様な夢と現実が混同しているカオス感がある。この文はその感覚を表現しているように思われる。

異性愛で述べた力の制御には両方の側面がある。まず，乾側ではアナフィラキシーとアクセス制御機能の未搭載によって，夢と現実が混同したことである。先述した通り，これは想定外の事態で最終的に乾は，自らが奮っていた夢の力で敗北する。「自ら焼き尽くす」という文が，映画の展開を暗示しているのである。もう一方の敦子側では，DCミニが敦子達の手に余る代物である，という乾の考えが読み取れる。DCミニの開発に依って夢の世界にアクセス出来るようになった。しかし，開発が原因で今回の事件の被害を敦子達は受ける。この事を「自ら焼き尽くす」という言葉で表現しているのである。つまり，科学が夢という神聖さを駆逐することで，科学は自身の持つ破壊的な力で自滅するのである。

また，「夜」は夢を表している為，「夜に花咲く～」は，神聖な夢が科学に依って明らかにされることで，その神聖性が削られることは阻止したい，という乾側の思惑とも読める。

「夜が夢見る昼」を「宗教の世界が夢見る科学の世界」と置換して連想を拡げていく。パレードを踏まえると，信仰対象が科学の力によって実体化するイメージが湧く。パレードに仏像が居たり，原作で悪魔等が現実に現れたりする点もこのイメージの根底にある。実体化に依って信仰対象は一層具体的な存在となる。具体化されることで，それが持つ強大さを目の当たりにする。しかし，具体化の弊害もある。科学の発展に伴い，【奇跡】的要素や神秘的な自然現象も次々と科学的に説明された。宗教には無い，科学が持つ圧倒的な力とは，未解明のものを【明らかにする】力である。ここのWSには羨望の要素があり，宗教は科学のこの力を羨望しているのである。

次に「昼が夢見る夜」を「科学の世界が夢見る宗教の世界」と置換してみる。科学に【明らかにする】力があるならば，宗教には逆の【明らかにしないままに

する】力がある，と考えた。わからないままで良い，という姿勢は目に見えないものも信じる，という考えにも通じる。これは科学には無い姿勢である。この【明らかにしないままにする】力も科学が持つ力と同等に圧倒的な力である。全てが明らかになれば想像の余地は生まれない。不確定要素を残すことで想像の余地が生まれる。これは夢の世界にも通じ，どんなに不思議なことでも，夢では自然と受け入れているし，夢だから，と納得できる。このわからないままで良い，という姿勢は，「いずれは自ら焼き尽くす」に対応しているとも考えた。夜は夜のままで，昼は昼のままであることが必要で，仮に相手の領域に踏み込むと自滅に繋がってしまう，という解釈である。

また，「夜」が夢を表している為，「夜に～」は，神聖な夢が科学に依って明らかにされ，その神聖性が削られることを阻止したい，という乾側の思惑と読むことも出来る。

〈パレードの詳細と補足的説明〉

「真昼の人～」からは力強さを感じる。これまでの連想から，昼が夜の領域に入ってくるな，という拒絶のメッセージと改めて解釈できる。

「通せんぼ」という言葉には，夜の世界，夢の世界が【秘密の園】，という印象がある。秘密のままで，夢を暴かないでほしいという夢側の抵抗とも解釈できる。話者の氷室はパレードの玉座周辺の人形達に混ざっており，言い終えると一斉に周囲の人形達が嘲笑する。故に，昼の民が夜の領域に入ることは愚かだ，と嘲笑している印象も受ける。

【WS2】には，昼と夜の対立が主軸にあった為，そこから拡がった解釈が多く生まれた。話者が介入を受けた氷室ということもあり，その背後にいる乾からの力強いメッセージ性を感じたWSである。その為，自分の意見を押し通している印象が強く，敦子達に対する警告的な意味合いがあるWSと言える。

V．総合考察とまとめ

今回取り上げたWSは2つであるが，筆者は以前に作中の全25個のWSを解釈した（坂中，2021）。全WSに6つの意味要素がある訳ではないが，多岐に渡る解釈が生まれた。今回取り上げた2つのWSは，最も意味要素が重層的である。

解釈において，連想を拡げるとWSが意味付けされ，意味不明さが解消されていった。すると『パプリカ』のWSは，意味的も統語論的にも崩壊していない文章に変貌し，意味不明故の魅力は喪失する。しかし，時間を置いてから同じWSと対峙すると，再び意味不明な文章として受け取られる。解釈に依って理解したと思っていても，その解釈をWSが持つ意味不明さと多義性が凌駕してくる。受け手が持つ解釈以外の意味が他にあるのではないか，という感覚をWSが突きつけて来て，意味不明で怖いが魅力的という感覚が蘇る。これが『パプリカの』WSが持つ魅力である，と筆者は考えた。

『パプリカ』のWSはどれだけ解釈しても，意味不明性とそれに付随する魅力は完全に喪失しない。WSの解釈は果てしなく拡がるもの，と感じさせる。どれだけ連想を拡げて解釈を行っても，WSは解釈の余地を提供し続ける。それ故にWSを意味不明と感じ続け，魅力もその意味不明性と共に喪失すること無く存在し続けるのではないだろうか。

筆者はWSが持つ【果てしなさ】によって，人は恐怖と魅力を感じているのではないか，と考えた。人は底知れぬものに直面すると恐怖を感じ，同時にその果てには何があるのか知りたい，といった知的好奇心由来の魅力も感じている様に筆者は思う。武者震いに近い感覚かもしれない，と今回の解釈を経て考えた。こういった【果てしなさ】を「狂気」的表現も有しており，それを『パプリカ』ではWSやパレードを通して受け手に感じさせている。そしてその果てを知る為に，WSという意味不明な文章を解釈しても，如何様にも解釈することができ，その果てには到達し得ない。したがって解釈を行って意味が自身の中で通じたとしても，新たな解釈が自身の中から思い浮かんだり，他者の解釈に触発されたりして生まれることがある。いくら解釈しても，意味の完全理解という終着点には辿り着かないのである。

本稿では，映画『パプリカ』のWSの解釈を通して【果てしなさ】と言う「狂気」的表現の魅力の一側面を示すことが出来た。しかし，『パプリカ』のWSという「狂気」的表現の一例に対する筆者の解釈と考察に留まっている為，「狂気」的表現が持つ普遍的な魅力や，その表現を通して魅力を感じる人の心について明らかになったとは言えない。他の「狂気」的表現も通して，それらの更なる知見を得ることは今後の課題である。

付記

本論文は，大阪府立大学現代システム科学域環境システム学類人間環境科学課程に提出した卒業論文の内容の一部を加筆・修正したものである。

文献

今敏（2006）．パプリカ（アニメ映画）．マッドハウス．

今敏（2007a）．Interview17 2007年4月アメリカから『パプリカ』に関するインタビュー．KON'S TONE（http://konstone.s-kon.net/modules/interview/index.php?content_id=19）（2020年5月18日閲覧）．
今敏（2007b）．Interview19 2007年4月アメリカから『パプリカ』に関するインタビュー．KON' S TONE（http://konstone.s-kon.net/modules/interview/index.php?content_id=21）（2020年5月18日閲覧）．
宮本裕子（2019）．今敏による『パプリカ』の翻案に見る，分裂する女性主人公．明治学院大学言語文化研究所紀要（2019）, 36: 49-62.
坂中亮太（2021）．映画『パプリカ』におけるワードサラダという表現．大阪府立大学現代システム科学域環境システム学類人間環境科学課程卒業論文．
筒井康隆（2002）．パプリカ（小説）．新潮文庫．

（2022年1月11日受稿，2022年2月2日受理）